

終わりよければすべて良し

1月より、読み続けてきたフィリピの信徒への手紙も今日で結びを迎えます。全体で4章にわたる手紙ですが、牢獄の中からだされながら、喜びの手紙といわれるこのパウロの手紙から、福音信仰のもつ力や、復活の希望など様々な励ましと示唆を、新型コロナウイルス問題のさなかにあって、また敬愛する姉妹がたの棺をともにこの会堂において、ご一緒に聴き取ることが許されたことを感謝しています。もともとこの手紙はフィリピの信徒たちから牢で生活をおくるパウロに心づくしの贈り物が届けられたことによります。これを届けたのが2章で登場したエパフロディトでした。彼はそのまま不便な生活を送るパウロのサポートにまわる予定でしたが、働きなかばで大病をわずらい、死ぬほどの目にあって、志半ばでフィリピの町に戻ることになる。彼が病に倒れたことがフィリピの信徒たちにも伝わり、それをエパフロディト自身が心苦しく思っているという記述がありましたから、距離が離れているとはいえ、そこそこに連絡が取り合われていたことが分かります。パウロはそれで自分の一番弟子ともいべき伝道者のテモテをつけて、エパフロディトをフィリピに送り返すのですが、それに託してか、前後してか、この手紙を送ったと考えられます。おそらく両者のあいだの手紙のやり取りは頻繁に行われていて、コリントの信徒への手紙みたいに、フィリピの信徒への手紙第二みたいなことも可能だったのかも知れません。いずれにせよ、今回の事情をうけて、みな心配してくれている自分の近況報告を記すのが自然の流れですし、エパフロディトを送り返すことについての心遣いも必要でした。そして、パウロはこの手紙を書く機会を生かして、自分が牢獄のなかに閉じ込められ、死を予感させられる

状況にあっても福音伝道の前進、イエス・キリストが自分の出来事を通して知れ渡り、宣べ伝えられるなら、それもよし、わたしは喜んでいと記します。そしてそのように喜ぶことの出来る根拠が、キリスト・イエスに結ばれていること、その出来事のあまりの素晴らしさに、それまで彼が手にしていたすべてのことが塵芥に等しいものになったこと。このキリストに結ばれ、復活のさまに与りたいのだと希望をのべてきました。思うに、近況を記すなかで、自分は決して挫けていないことを伝え、その理由を述べ、このキリストに根ざした生き方にあなたがたも与って欲しいと、十字架の死に至るまでのキリストの献身をキリスト者の生き方の模範として示し、自分も、エパフロディトも、主の苦難に連なる生き方をしていることを伝えました。そして、最後に、本来、この手紙の執筆の動機であった贈り物への感謝を置いたのです。彼らの心づくしの贈り物、モノだけではなく、これまでのエパフロディトも遣わしてまでの行き届いた配慮に対するお礼と感謝も兼ねていると思うのですが、この贈り物への感謝の述べ方がまた一筋縄ではいかないというか、独特の表現になっています。この箇所から、パウロが何を喜び、何を警戒しているかを、見てとることが必要でしょう。この贈り物への感謝の箇所を二回にわけて学んでいますが、前回のところ4章の10節から14節までの箇所では、あなたがたからの贈り物を非常に喜びましたと記す一方で、物欲しさで言っているではありません、わたしは自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えているのです、と告げ、わたしはいついかなる場合でも対処する秘訣を授かっている。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能ですと、やはりキリスト・イエスに結ばれていることによってすでに十分に満たされているのだという立場を崩しません。どんな状況に置かれてい

ようともキリスト・イエスの恵みによって守られている。パウロは、わたしを強めてくださる方のお陰で、つまりわたしの裁き主であり、救い主であり、贖い主であるキリスト・イエスのお陰ですべてが可能なのです、と告げるのです。わたしはいかなる境遇にも満足する術を習い覚えたと言う。実際にいま牢獄のなかにおいて不自由な生活、肉体的にも非常に劣悪な状況が想像される監獄の中からも愚痴や嘆きではなく、讚美と喜びと感謝を信徒たちに向かって発信することができていたのです。

パウロは、しかし、そう述べることでフィリピの人たちの志を貶めるようなことは望みません。ちゃんと彼らがしたことがどれほどのことであったかを 15 節で明らかにしています。ここからが今日読んだ箇所ですが「フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおりに、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りで、わたしの働きに参加した教会はあなたがたの他に一つもありませんでした。また、テサロニケにいたときにも、あなたがたは、わたしの窮乏を救おうと何度も物を送ってくれました。」と、フィリピの信徒たちとパウロの関係が本当に特別であったことを指摘しています。

この、教会からモノが送られるということには、わたしにも思い出があって、神学校に行っているときに、半田教会を初めとして在籍した教会から奨学金を頂いたことを忘れることはできません。また二年目の夏期伝道実習は当時、体育会系のスパルタで有名な牧師のところに送られ、実習期間もフルの 50 日間という当時でもよくやるという感じの教会でした。篠田夫人は半田教会に来た神学生を太らせて帰すのが楽しみだったと聞いたことがあるのですが、その夏期伝道先は必要経費を渡されて自炊がルールでした。あとで話を聞いてみると実習のハードさに音をあげて神学生がヘタれば、そこの牧師夫人が食事を

作ってくれるようでしたし、実際、おかずのおすそ分けをよく頂きましたが、けっこう、わたしはしのげてしまえて指導牧師が食事に関してはあてが外れたような顔をしていたのを思い出します。あるとき、東京の教会と牧師から段ボール箱にいっぱいの缶詰めやらレトルト食品が届きまして、指導牧師が呆れて、これまでたくさんの神学生がうちに來たけれど、教会や牧師から食べものを送られた神学生は君が初めてだと笑って言いました。そして、これは忘れられないのですが、実習最後の神学生を送る会のときに、これも半田教会でもするように教会員の方々がそれぞれ寸評というか、贈る言葉をくださったのですが、指導牧師が、この食品が送られてきたことにもふれて、この神学生は教会に愛されているから、教会を愛する牧師になるだろうと言ってくださった。この手紙の中で、パウロが繰り返し、フィリピの信徒たちに感謝をしているのも、教会に覚えられている、それを支えとして福音伝道を続けてゆくことの喜びが大きいのです。であるからこそ、ここでも「贈り物を当てにして言うわけではありません。あなたがたの益となる豊かな実を望んでいるのです」と付け加えることを忘れません。ここは大事なところで、伝道者パウロを支える。それもモノや祈り、人まで遣わして、物心両面で支える。それらの行いが神さまとの関わりの中で実を結ぶこと、位置づけられることが大切なのです。具体的に彼らがますますパウロを愛し、献げることが、その働きがキリストを愛し、所属しているキリストの群れである教会の徳を高めるような愛しかたとなるようにパウロは願っている。ギブアンドテイクの金銭関係ではなく、惜しみなく施し、惜しみなく受けることのできる関係が築かれることを願っている。パウロに献げていることはつまるところ、神の伝道、キリスト・イエスを宣べ伝える働きに参加していることに他ならないから

です。だからパウロは 18 節で「それは香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです」と語るのです。パウロを喜ばせているという段階でとどまるのではない。そういう考えであれば、人間パウロと関係がこじれれば終わってしまうでしょう。またフィリピの人々が支えてやっているという気持ちを毛ほども持つことのないように、パウロは、「物欲しさにこういっているのではありません」「贈り物を当てにしていうのではありません」と繰り返したのです。彼らは、神さまに向けて献げものをしているのです。恵みとしてキリストの福音をパウロを通して与えられた彼らの感謝の応答として、ただで福音が与えられたのだから、彼らも自分を空しくして、高ぶることなく、神さまから与えられたものの中から、パウロへと、祈りを、時間を、能力を、そして贈り物を送っている。わたしたちが自分の命を神さまに対して、お金で贖うことが出来ないように、贖われたこと、救いを受けたことへの喜びから献げることのできる者となるように、彼らの良い志しがパウロを通して、神さまの御前に届けられるように、香ばしい香りとなるように、パウロはこの贈り物のなかに、彼らを高ぶらせ、躓きとなるようないっさいの事柄を持ち込ませないように配慮を働かせているのです。モノをあげたり、お金を使うことはなかなか難しいことです。それは善い行いですが、人を支配したり、歓心を買ったりという人間的な動機が入り込みやすいからです。それは罪の機会とすらなり得る。イエス様も右手のしていることを左手に知らせるなというアドバイスをしておられますね。贈り物をキリストの恵みに対する愛をあらわす機会として、神さまに喜ばれる献げものとなるように整えることが伝道者パウロの最後の配慮であったことを、心に留めたいと願います。

お祈りいたします。